

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：13802

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830039

研究課題名(和文) 自閉症スペクトラム児の精神的健康と適応に関連するプロテクトティブ要因の縦断的検討

研究課題名(英文) A relation between life adaptation and protective factor in autism spectrum children

研究代表者

高柳 伸哉 (TAKAYANAGI, NOBUYA)

浜松医科大学・子どものこころの発達研究センター・助教

研究者番号：20611429

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：H24年度、H25年度の研究の遂行は計画通り実施された。公立小中学校生徒約7,500名を対象とした調査では、性別・学年・ASSQ群ごとに重回帰分析を行った結果、高ASSQ群は定型群にくらべて有意な影響を及ぼす要因の数が全体的に少ないこと、定型群と高ASSQ群でリスク要因・プロテクトティブ要因が異なることが示唆された。一方、発達障害のある子どもの保護者24名と公立小中学校13校の教員を対象としたインタビュー調査では、発達や行動で気になる子どもでも、周囲の友人や大人からのサポートの受けやすさが生活や学校でうまく適応するための要因として多く挙げられた。

研究成果の概要(英文)：My research was carried out as planned. In the survey of about 7,500 public elementary and junior high school students, as results of the multiple regression analysis by gender, grade and ASSQ-score groups, high ASSQ (autistic-tendency) groups have less significant protective factors (e.g. problem solving and change of pace) as compared to the standard groups. The results suggest that risk and protective factors in the high ASSQ groups are different from the standard groups. On the other hand, in an interview survey of teachers in 13 schools public elementary and junior high schools and 24 people parents of children with developmental disabilities, even children to be worried about in the behavior and development, they are adapt well in school by their familiarity and ease of support from friends and adults.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：自閉症スペクトラム リスク要因 プロテクトティブ要因 ソーシャルサポート 反応スタイル

1. 研究開始当初の背景

自閉症スペクトラム障害 (ASD) は社会性とコミュニケーション、想像力の障害を中核症状とした発達障害である。遺伝要因と環境要因の様々な影響が指摘されており、近年の疫学研究によれば ASD の有病率は従来の想定よりも高く1~2.64%前後とされ (Kim et al., 2011), 罹患率の増加を指摘する研究もある (Pinborough-Zimmerman et al., 2012)。また, ASD の中核症状 (ASD 特性) の程度も多様で, 医学的な診断基準に満たないものの社会生活に困難を抱える人々はさらに多いと考えられており, 社会生活への適応を促す支援が強く求められている。

ASD 児者においては一般的に, うつ病や不安障害といった二次障害にいたることが多いと指摘されており (Mazurek & Kanne, 2010), ASD 特性が社会生活への不適応だけでなく精神的健康にも影響を及ぼすリスク要因であることが示唆される。うつ病などの精神障害に関して, 近年では障害へ罹患する可能性を高めるリスク要因だけでなく, リスク要因の影響を緩和して障害への罹患を防ぐプロテクティブ要因を明らかにする研究も行われている。たとえばうつ病では, いじめや死別などネガティブな出来事の体験というリスク要因を有しながらも, 問題解決や気晴らしなどのコーピングができ, 友人や家族からのソーシャルサポートを受けられるというプロテクティブ要因の多い人は, うつ病にかかる割合が低くなることが示されている (Essau, 2004)。しかし, このようなプロテクティブ要因を検証する研究の多くは定型発達児者を対象としており, ASD 児者に焦点を当てた研究はまだ少ない。また, ASD 児を対象とした研究では, 友人関係のある子どもよりも友人関係の乏しい子どもの方が不安症状がより低かったという, 定型発達児者の結果と反する報告もあり (Mazurek & Kanne, 2010), ASD 児者と定型発達児者では異なるプロテクティブ要因が作用している可能性も示唆されている。臨床と教育の場における ASD 児者への支援では, 構造化され具体的な対処法を学べる認知行動療法が有効であることが示されエビデンスを確立しているが, その一方で, 生活においてどのような要因がうつ病や不適応へのリスクを軽減するかは明らかにされていない。

2. 研究の目的

(1) 一般小中学生におけるうつと不適応に関連するプロテクティブ要因の検証

単一市内の全小中学校における児童・生徒を対象とした質問紙調査を行い, うつや不適応に関連するリスク要因とプロテクティブ要因の検証を行う。さらに, リスクの高い子どもについて担任教師への半構造化面接を行い, 質問紙調査結果の妥当性を検証するとともに学校生活の様子や子どもの特徴について質的データを収集する。

(2) ASD 児におけるうつと不適応に関連するプロテクティブ要因の検討

診断を受けている ASD 児を対象に質問紙調査を行い, うつや不適応に関連するリスク要因とプロテクティブ要因の検証を行う。さらに, 保護者への半構造化面接を行い, 生活実態と子どもの特徴について質的データを収集し, 研究1の教師面接のデータと合わせて分析することで, より具体的なプロテクティブ要因を検討する。

(3) 定型発達児と ASD 児の適応に影響を及ぼすプロテクティブ要因の縦断的検討

研究1と2の教師・保護者面接で得られた質的データを分析した結果から要因を追加し, 一般小中学生と ASD 児を対象に縦断調査を実施して, 研究1と2の結果を合わせて定型発達児と ASD 児の精神的健康や適応とプロテクティブ要因の因果関係を検証する。

3. 研究の方法

(1) 一般小中学生におけるうつと不適応に関連するプロテクティブ要因の検証 (研究1)。単一市内全校の一般小中学生を対象に質問紙調査と教師への面接を行い, 適応状態や行動傾向を測定し, 各要因の関連を検証した。測定尺度は抑うつ (DSRS-C 日本語版)、生活不適応 (SDQ)、ASD 特性 (ASSQ)、ストレスイベント、ソーシャルサポート、コーピング (反応スタイル尺度) を用いた。

(2) ASD 児におけるうつと不適応に関連するプロテクティブ要因の検討 (研究2)。ASD 児への質問紙調査と保護者への面接を行い, うつと不適応に関連する要因を検証した。

(3) 定型発達児と ASD 児の適応に影響を及ぼすプロテクティブ要因の縦断的検討 (研究3)。研究1と2の面接結果から検討したプロテクティブ要因を追加し, 単一市内全校の一般小中学生と ASD 児に縦断調査を行い, 定型発達児と ASD 児における結果を比較することで, ASD 児の精神的健康や適応とプロテクティブ要因の因果関係をより実証的に検証する。なお, 研究3については H25 年度のデータが現在回収され整理中であり, 今後詳細な分析が行っていくところである。

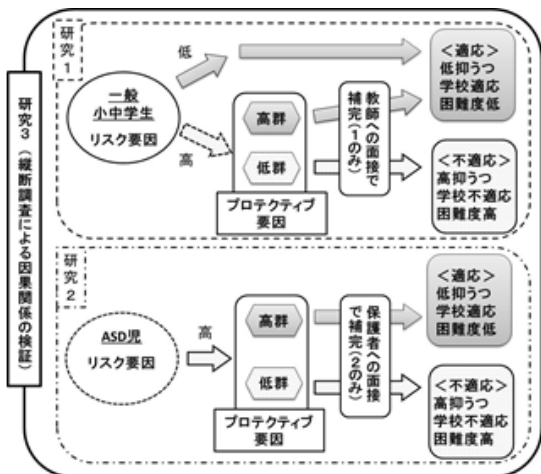


図1 本研究のモデル

4. 研究成果

H24年度、H25年度の研究の遂行は計画通り実施された。H25年度のデータは、現在回収・整理中で詳細な分析結果はこれからであるため、H24年度の分析結果から示された成果を記す。

公立小中学校生徒約7,500名を対象とした調査では、自閉症傾向尺度（ASSQ）を用いて高得点10パーセンタイル群を高ASSQ群、その他を定型群と便宜的に分類して分析を行った。t検定を行った結果、小学校低学年（1～3年）では、抑うつ気分と保護者評定の不適応度で高ASSQ群が有意に高く、ソーシャルサポートで高ASSQ群が有意に低いことが示された（図2）。小学校高学年（4～6年）では、上記の傾向に加えてさらに、活動性の低さと友人・家庭・教師・学業ストレスで高ASSQ群が有意に高く、うつを高めるとされる反すうも有意に高い結果となった（図3）。中学生では、小学校高学年の傾向に加え、高ASSQ群の家庭ストレスの効果量dがより高くなるとともに、あらたに問題解決が有意に低くなった（図4）。

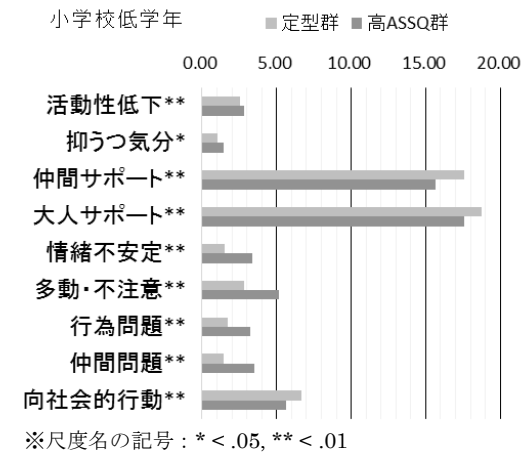


図2 小学校低学年におけるt検定結果

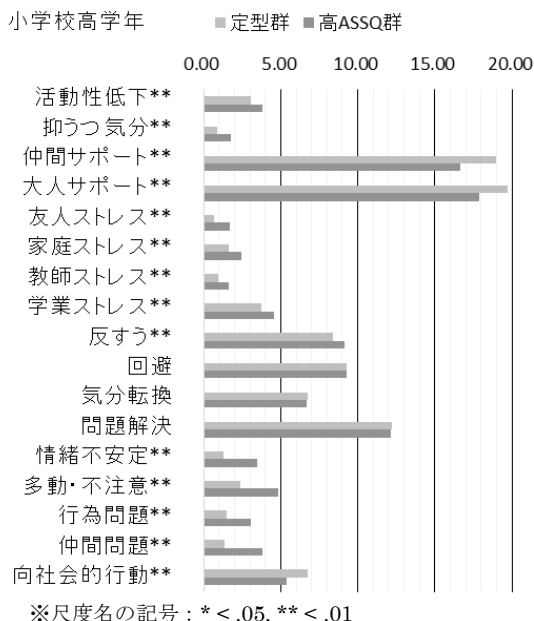


図3 小学校高学年におけるt検定結果

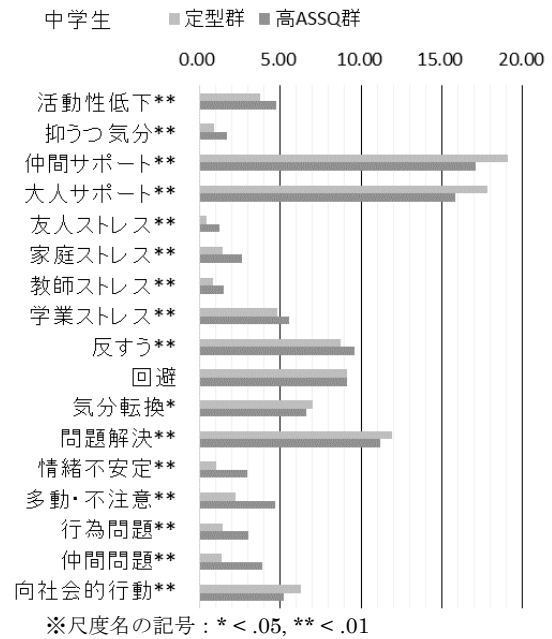


図4 中学生におけるt検定結果

また、性別・学年・ASSQ群別に、抑うつや生活不適応を従属変数、ストレスイベントやソーシャルサポート、反応スタイルを独立変数として重回帰分析を行った結果、高ASSQ群は定型群にくらべて有意な影響を及ぼす要因の数が全体的に少ない傾向にあること、定型群が抑うつの軽減に気分転換や問題解決などが抑うつや不適応を減らすプロテクティブ要因が示される一方で、高ASSQ群では気分転換のみがプロテクティブ要因として多くみられるなど、定型群と高ASSQ群で異なるリスク要因・プロテクティブ要因が示唆された。中学生における男女・ASSQ得点群別の結果を以下に記す。中学生男子では、定型群では多様なリスク要因・プロテクティブ要因が抑うつ気分に関連する一方、特性群では反すう思考がリスク、気分転換と大人サポートがプロテクティブ要因と、有意な影響を及ぼす因子が少なかった（図5）。また中学生女子では、男子同様に

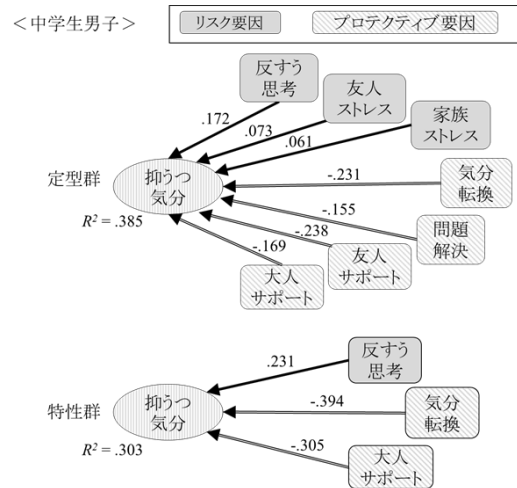


図5 中学生男子の重回帰分析結果

多様なリスク・プロテクティブ要因が見出され傾向も男女で類似していた(図6)。しかし、特性群女子では要因の数は特性群男子同様少ないものの、学業ストレスがリスク要因、気分転換と友人サポートがプロテクティブ要因として有意であり、特性群男子と異なる要因が抑うつ気分に影響を及ぼす結果となった。定型群と特性群の結果の差や、特性群における男女での要因の違いについて明確な理由は見つけられないが、定型群と特性群の人数差(定型群:男子925名、女子965名、特性群:男子117名、女子77名)から、特性群で有意な要因が見出されにくい可能性は考慮する必要がある。今後の追跡調査によりさらなる検証を重ねていくものとする。

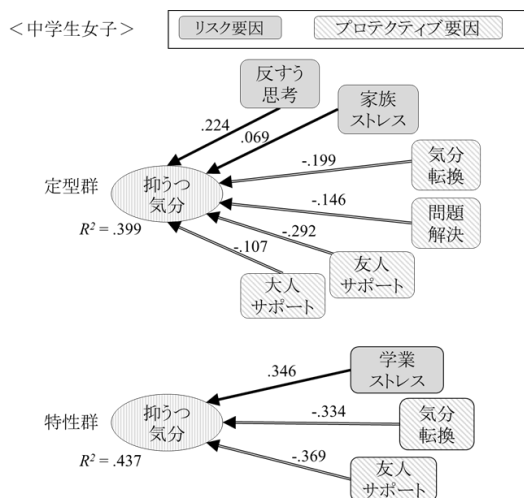


図6 中学生女子の重回帰分析結果

一方、発達障害のある子どもの保護者24名と公立小中学校13校の教員13名を対象としたインタビュー調査では、発達や行動で気になる子どもでも、周囲の友人や大人からのサポートの受けやすさが生活や学校でうまく適応するための要因として多く挙げられた。

なお、最新の調査は2014年3月に行われ、データは現在整理・分析中であるため、今後順次発表し、さらなる研究や支援活動に発展させていく。

考察

現時点での分析結果のまとめのみとなるが、自閉症傾向尺度であるASSQを用いた分類である定型群・特性群ごとの分析により、いずれの群でも抑うつ気分につながるリスク要因のみならず、認知的対処やソーシャルサポートの豊富さが抑うつ気分を軽減するプロテクティブ要因として作用している可能性が示唆された。また、人数の少なさが検討課題ではあるが、特性群男女においてはリスク・プロテクティブ要因ともに少ないが、その分1つ1つの影響力の強さがみられ、抑うつ予防プログラムを検討する際にも明確な焦点を当てて各要因を扱っていくことが

効果的であることが示唆された。あるいは、プロテクティブ要因の少なさは思考や視野の狭さという認知的脆弱性を反映している可能性もあるため、他のプロテクティブ要因にも目を向けたりサポートを求められるように支援する方策も有用であるかもしれない。今後は引き続き2013年度のデータを追加して解析を進めるとともに、本研究の結果を子どものリスク要因の低減とプロテクティブ要因の促進につなげる支援プログラムの作成・実施など、より実践的な取り組みへと発展させていくことを計画している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5件)

- ① 高柳伸哉、伊藤大幸、田中善大、原田 新、大嶽さと子、望月直人、染木史緒、野田航、中島俊思、辻井正次、小中学生における欠席行動と保護者評定による行動的・情緒的問題との関連、臨床精神医学、査読有、42巻、2013、1563-1572
- ② 原田 新、伊藤大幸、望月直人、大嶽さと子、高柳伸哉、中島俊思、野田 航、染木史緒、辻井正次、日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 自己評定フォームの構成概念的妥当性：抑うつ、攻撃性、親評定フォームとの関連から、小児の精神と神経、査読有、53巻、2014、343-351
- ③ 原田 新、伊藤大幸、望月直人、中島俊思、野田 航、染木史緒、高柳伸哉、田中善大、大嶽さと子、辻井正次、日本語版 Strengths and Difficulties Questionnaire 教師評定フォームの構成概念的妥当性：抑うつ、攻撃性、親評定フォーム、自己評定フォームとの関連から、小児の精神と神経、査読有、54巻、2014、17-28
- ④ 伊藤大幸、松本かおり、高柳伸哉、原田 新、大嶽さと子、望月直人、中島俊思、野田 航、田中善大、辻井正次、ASSQ 日本語版の心理測定学的特性の検証と短縮版の開発、心理学研究、査読有、85巻、2014、印刷中
- ⑤ 田中善大、伊藤大幸、高柳伸哉、原田 新、野田 航、大嶽さと子、中島俊思、望月直人、辻井正次、小中学校における友人関係問題に対する ASD 傾向及び ADHD 傾向の影響の検討、精神医学、査読有、56巻、2014、印刷中

[学会発表] (計 5件)

- ① 望月直人、原田 新、高柳伸哉、辻井正次、単一市内の大規模調査からみえた子どものメンタルヘルスとその支援①—中学生の非行行為と抑うつ・攻撃性との関連—、日本心理臨床学会第32回秋季大会、2013年8月26日、パシフィコ横浜

- ② 高柳伸哉、原田 新、望月直人、辻井正次、単一市内の大規模調査からみえた子どものメンタルヘルスとその支援②—児童生徒の不登校（欠席日数）とメンタルヘルス、保護者からみた適応との関連—、日本心理臨床学会第 32 回秋季大会、2013 年 8 月 26 日、パシフィコ横浜
- ③ 原田 新、高柳伸哉、望月直人、辻井正次、単一市内の大規模調査からみえた子どものメンタルヘルスとその支援③—学校臨床支援に必要なアセスメント：SDQ の三者評定の有用性—、日本心理臨床学会第 32 回秋季大会、2013 年 8 月 26 日、パシフィコ横浜
- ④ Nobuya TAKAYANAGI, Hiroyuki ITO, Yoshihiro TANAKA, Shin HARADA, Masatsugu TSUJII, A relation between autism spectrum, school absenteeism and behavioral and emotional problems of elementary and middle school students, 10th International Congress Autism Europe, 2013 年 9 月 26 日, Budapest Congress & World Trade Center
- ⑤ 伊藤大幸、高柳伸哉、野田 航、田中善大、小中学生の発達とメンタルヘルスに関する縦断コホート研究 (2) —思春期の問題行動の予測と因果的メカニズムの探索—、日本発達心理学会第 25 回大会、2014 年 3 月 22 日、京都大学

〔図書〕 (計 1 件)

- ① 監修：辻井正次、著者：高柳伸哉他、金子書房、発達障害者支援とアセスメントのガイドライン、2014、427

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

高柳 伸哉 (TAKAYANAGI, Nobuya)
 浜松医科大学・子どものこころの発達研究センター・助教
 研究者番号：20611429

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：